

# 「日系ブラジル人」実践コミュニティにおける

## アイデンティフィケーション

### ～グループ<シランダ>の取り組みから～

郡司 英美（一橋大学大学院）

#### 1、問題設定

近年、「日系ブラジル人」の滞在の長期化の現状を反映したかたちで、「日系ブラジル人」の子どもを支援する実践や研究は、幅広く展開されてきている。たとえば、学力問題と絡めて、進路の保障やJSLカリキュラムの開発・研究が積み上げられてきている。また、年少者の日本語習得の支援における親の意識の重要性から、親子参加型の日本語支援に関するものもある。

その中で、坪谷（2005）が分類するように、地域の学習サポートは、様々な活動を展開しており、子どもたちの「アイデンティティ」保持に危機感を持った親たちにより開始されることが多い母語教育型の支援も、そのひとつとして数えられる。

太田は、早い時期から、子どもの母語や母文化に対して敬意を払うことなく日本語のみを学ばせることへ対して、批判的視点を提示してきた。（太田 2000）というのも、公教育の中で母語教育を行おうとすると、「母語教育は家庭が責任をもって行うべきである」という言説が幅を利かせていたり、実際に日本語を教えている関係者からの、サバイバルのための日本語の必要性に関する議論と対立したりするためである。一方で、母語・継承語・バイリンガル教育に対する研究会も立ち上げられ、現に実施されているかどうかに関わらず、少しずつでありながらも母語教育への関心も広がってきているともいえる。

ここで、オールドカマーの歴史を見ると、本名宣言を争点とするかたちで「アイデンティティ」の保持・確立を目指す活動が展開されてきた。そ

して、会によって幅があるものの、具体的には「自らが面しているさまざまな問題」を議論したり、民族楽器・民族言語の習得などを行っている。（金 1999、倉石 2004）

一方、「日系ブラジル人」の場合も、親子間における世代間の「アイデンティティ」ギャップについては語られてきた。（コガ 2000）また、各地で立ち上がっている母語教育型の支援活動の中身について、語られてきている。その中には、IAPEのように、自分のルーツを探る旅を主催するものも含まれている。（沖縄タイムス 2000 年 8 月 23 日版）しかしながら、実態としての活動内容は羅列化される一方で、あるスパンにおける、活動を取り巻く変化については描かれてこなかった。

それでは、「アイデンティティ」の確立・保持ということを掲げた母語教育型の支援は、具体的にはどのような活動として展開されてきているのだろうか。教室における活動は、どのようなことを争点としながら、どのような機能をはたしてきているのだろうか。そして、現代社会における「アイデンティティ」概念の変容と母語教育型支援活動における「アイデンティティ」概念との関係を考察したい。

#### 2、対象・方法

母語教育型の支援活動の歴史と現状を探るために、関東圏内の A 市で活動しているグループ<シランダ>（仮名）を対象とする。<シランダ>は、「日系ブラジル人」の教育・相談に関わる当事者自身によって 1996 年に活動を開始されたグルー

ブであり、毎週土曜日に「日系ブラジル人」家族が集住する団地内にある公民館で、ポルトガル語を教えたり、ブラジルに関する行事を行っている。

活動開始から10年目を迎える<シランダ>は、グループ外の人に対して、どのように活動語ってきたのだろうか。(言説レベルでの変化)そして、実際の活動においては、どのような争点をもちながら、どのような緩やかな変化をもたらされてきたのだろうか。(活動レベルでの変化)

これら二つの側面における変化を探るため、まず、今までに受けた取材資料の語りを分析する。そして、発足当時から活動に参加している報告者の実践記録や他の関係者へのインタビューから、①活動内容、②場所・空間、③関わる人、④構成メンバーの4点における変化を明らかにする。さらに、<シランダ>の方向性に関して話し合った記録から、グループ内部の語りにおいて、何が争点になってきたのかを明らかにする。

### 3. 結果と考察

#### ニーズへの対応による活動内容の拡張

当初は、子どもに対して、ポルトガル語の読み書きを中心に行っていたが、学校・生活上の必要書類の翻訳・相談や日本語(学校の宿題、作文、ひらがな練習など)、文字を書き始める以前の段階の子どもへの遊びを通した学習準備などが活動に組み込まれてきた。あるいは、ポルトガル語を学びたいと足を運んできた日本人を受け入れるようになる。

この活動内容の拡張は、構成メンバーの中学生や親が持ち込んだものに対して、<シランダ>内部で争点となりながらも、関わる人がひとつひとつ対応していく中で、漸次的にはほぼ正式な活動に組み込まれたかたちをとっている。そして、その前提として、拡張された役割を担う人が必要とされるが、その役割も固定されたものではなく、自らも二人の子どもを学ばせている臨床心理士や、不就学だった中学生、ポルトガル語を学ぶ目的で<シランダ>を訪れた日本人の元保育士、当初は調査で訪れた報告者、<シランダ>の活動する学

区にある小学校の日本語指導教室担当の先生、口コミで紹介された学生ボランティアなどが隙間をうめるかたちで活動を展開させてきている。

このような構成メンバーやニーズの多様化に対応するかたちの活動上の変化に伴って、言説上でも変化が見られる。つまり、帰国を念頭に置いて語られる、セルフヘルプ的意味合いの濃い語りから、様々なメンバーを想定して、ブラジル文化やポルトガル語を通して、あるいは子どもの教育を媒介にして、立ち上げ・発信する語りへと重心が移ってきているのである。

#### アイデンティティからアイデンティフィケーションへ

現在も「日系ブラジル人」としての「アイデンティティ」保持・確立を目指すことは活動目的のひとつとして掲げられている。とくに、日本社会への参画を求められている文脈に対応する場面では、説明の要になるといってもよい。

しかしながら、<シランダ>を構成しているメンバーという観点からは、いわゆるエスニック・コミュニティとは呼び難く、そこでの活動は、日本人も含みながら、学校での関係を基盤とした友人関係や、大人—子ども関係を基盤に展開されている。つまり、実践コミュニティとよぶほうが適しているものへと変貌している。

この状況で、母語教室の看板の下で日本語を教える活動と「アイデンティティ」概念は、齟齬をきたしていない。活動の拡張の争点とはなったが、それは、「アイデンティティ」をめぐるものではない。むしろ、メンバーの一人が語っているように、日常生活において「困難」を抱えたときの語り—聴く関係を構築する取り組みとして機能している。そして、それを「日系ブラジル人」間の関係に限定していない。このことは、物語論的な解決と等しく見えるのだが、坂本(2005)が言及するようにアイデンティフィケーションの実践と名付けられるものである。